

統計流体力学と量子電気力学の相似性と相違点

名大 工 応物 桑原 真二

§ 1. まえおき

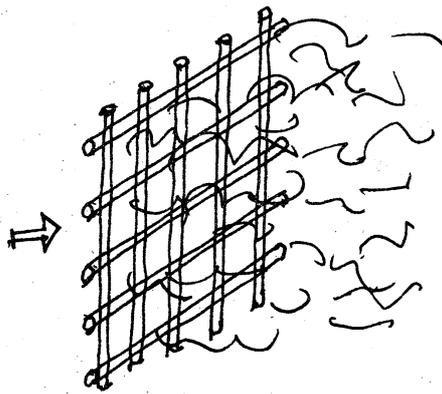
最近、乱流の統計理論において量子電気力学 (QED) の手法、とくにくりこみの概念およびそれによる数学的手法が用いられてきた。しかし、乱流は量子電気力学的現象の底にある物理的意味を適確には握し、その間の数学的構造の相似性に着目して、使用するのではなく、意味のない sophistication に陥りかねないとも限らない。この論文では、そのような観念に立ち、その一歩として、2, 3 の相似点、相違点を指摘する。

まず両者の対象とすなわち物理現象を示そう (図 1, 2 図)。統計流体力学 (SHD) は平均流と乱れとの相互作用, QED は電子と光子との相互作用をとりあつかう。平均流, 電子は性格の割合にはあまりに対象であり、乱れ, 光子は甚だ波動的性格が強く、発生、消滅をくりかえしている。

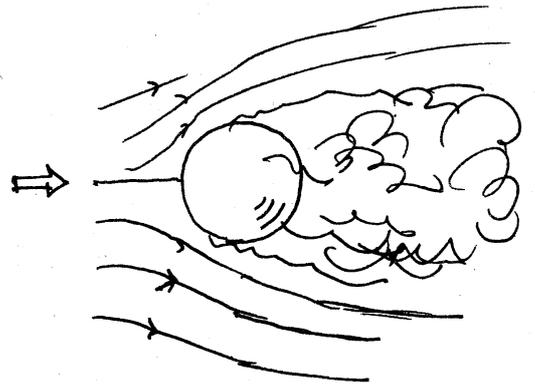
§2. SHD及 α -QEDの数学的構造

古典統計力学では力学変数を確率変数とみなし、確率空間 (=相空間, phase space) における力学変数の分布 (分布密度関数) を対象とする。力学変数は Hamilton の方程式によって記述され、物理的に意味のある観測量は、力学変数の関数である対応する量の統計的平均値としてあらわされる。

SHDでも数学的構造は古典統計力学と全く同じである。



(a) 格子の後の乱流



(b) 円球の物体(球)の伴流

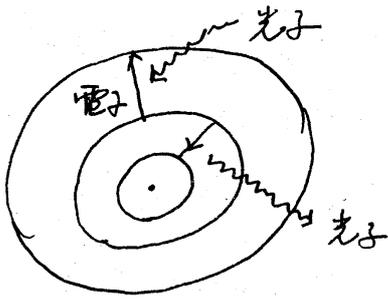


(c) 境界層乱流

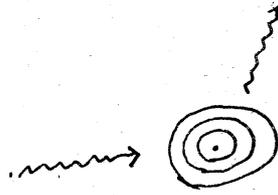


(d) 内部乱流 (Hagen-Poiseuille の乱流)

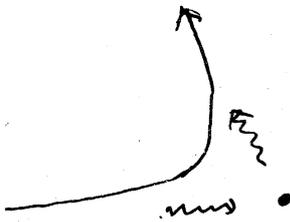
中上図 統計流体力学(乱流)の対象の典型的な例



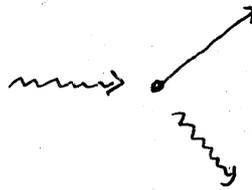
(a) 原子による光子の吸収, 放出



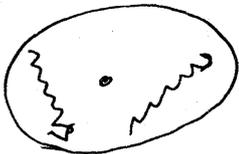
(b) 原子による光子の散乱



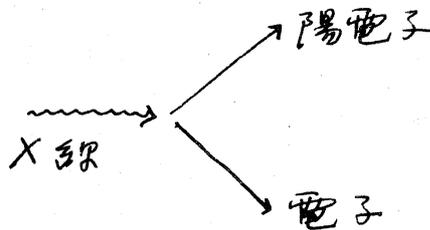
(c) Rutherford 散乱



(d) Compton 散乱



(e) スロフトX線の中,
hyperfine structure



(f) pair creation

才2回 量子電気力学の対象とする現象

たゞ異なるのは力学変数が离散自由度でなく連続自由度の連
度場 $\psi(x)$ であり、それらを支配する基礎方程式が Navier-

Stokes 方程式である。力学変数が連続自由度
 ありのために、相空間も、高次元の空間でなく（ソレノイタル
 流, $\text{div } v = 0$) $v(x)$ のはし関数空間と存子。1) の力学系
 の時間的发展はその相空間の中の1点の運動と考えられ、そ
 の運動は N.-S. 方程式によって支配される。N.-S. 方程式を
 圧力を消去して速度だけで表わせば

$$\frac{\partial v_i}{\partial t} = -v_m \frac{\partial v_i}{\partial x_m} + \nu \nabla^2 v_i + \iiint_V G \frac{\partial}{\partial x_i} \left(\frac{\partial}{\partial x_m} (v_m' \frac{\partial v_i'}{\partial x_m}) \right) d^3x'$$

$$+ \iint_{\partial V} \left(\frac{\partial v_i'}{\partial t} + v_m' \frac{\partial v_i'}{\partial x_m} - \nu \nabla'^2 v_i' \right) \frac{\partial G}{\partial n_m} dS \equiv Q_i(v) \quad (2.1)$$

と存子。ここで $v_i' = v_i(x')$ 等であり、 V は流れの場全体、
 ∂V はその境界である。この N.-S. 方程式では、流れの場全
 体での速度分布、境界での速度及びその時間微分がわかれば
 場全体のその後の速度の発展が定められ子という形式をとっ
 ている。今ほうほう演算子に対する Green 関数:

$$\left. \begin{aligned} \nabla^2 G(x, x') &= \delta(x - x') \quad x \in V \\ G(x, x') &= 0 \quad x' \in \partial V \quad x (\neq x') \in \partial V \cap V \end{aligned} \right\} (2.2)$$

である。

相空間における確率分布汎関数 $\varepsilon P = P[v(x), t]$ とす
 れば一般化された Liouville 方程式は

$$\frac{\partial P}{\partial t} + \iiint \frac{\delta}{\delta v_i(x)} (Q_i(v(x)) P[v, t]) d^3x = 0 \quad (2.3)$$

となる。P の一種の Fourier 変換をなす特性汎関数:

$$\Xi[z(x), t] = \int e^{i(z \cdot v)} P[v, t] \delta v \quad (2.4)$$

をもちければ L-方程式は Hopf 方程式に変換される:

$$\frac{\partial \Xi}{\partial t} = i \int z_\lambda Q_\lambda \left(\frac{\partial}{i \partial z_\lambda} \right) \Xi d^3x \quad (2.5)$$

QED では電磁場 $(A_\mu) = (A_1, A_2, A_3, i\phi)$ に対する Maxwell の方程式及び電子場 $(\psi_\mu) = (\psi_1, \psi_2, \psi_3, \psi_4)$ に対する Dirac 方程式:

$$\square A_\mu = -\frac{1}{c} j_\mu \quad (2.6)$$

$$\gamma_\mu \left(\frac{\partial}{\partial x_\mu} + \frac{e}{c} A_\mu \right) \psi + \kappa \psi = 0 \quad \kappa = \frac{mc}{\hbar} \quad (2.7)$$

$$j_\mu = ic \bar{\psi} \gamma_\mu \psi \quad (2.8)$$

を基礎とする。2) $x_\mu = (x_1, x_2, x_3, ict)$, γ_μ は Dirac 行列で

$$\left. \begin{aligned} \gamma_2 &= -i \begin{pmatrix} 0 & \sigma_2 \\ -\sigma_2 & 0 \end{pmatrix}, \quad \gamma_4 = \begin{pmatrix} I & 0 \\ 0 & -I \end{pmatrix}, \quad I = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \\ \sigma_1 &= \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_2 = \begin{pmatrix} 0 & -i \\ i & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_3 = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix} \end{aligned} \right\} \quad (2.9)$$

と之ら示すことができた。 $\bar{\psi} = \psi^\dagger \gamma_4$ (\dagger は Hermite 共役) は ψ の Dirac 共役である。その他一般の慣用にしたがう。

相互作用のある輻射場と電子場に対する Schrödinger 方程式は

$$i\hbar \frac{\partial \Psi'}{\partial t} = H \Psi' \quad (2.10)$$

$$\bar{H} = \bar{H}_0 + \bar{H}_1, \quad \bar{H}_0 = \bar{H}_R + \bar{H}_M \quad (2.11)$$

$$\left. \begin{aligned} \bar{H}_R &= \frac{1}{2} \int \left\{ \left(\frac{\partial A_4}{\partial x_1} - \frac{\partial A_1}{\partial x_4} \right)^2 + (\text{rot } A)^2 \right\} d^3x \\ \bar{H}_M &= \frac{\hbar^2}{2m} \int \nabla \psi^* \cdot \nabla \psi d^3x \\ \bar{H}_1 &= -\frac{1}{c} \int \mathbf{j} \cdot \mathbf{A} d^3x \end{aligned} \right\} \quad (2.12)$$

で表わされる。

ここで SHD と QED との関係を考えれば、力学系の運動方程式としては、(2.1) と (2.6), (2.7) とが対応し、統計法則を支配する方程式として、(2.3) 又は (2.5) と (2.10) とが対応している。SHD では速度場 $v_e(x)$ は平均値と乱れの和であり、明白な分離が常に可能であるわけではない。それに対し、QED では輻射場 A_μ と電子場 ψ_μ とは始めから完全に分離されている。

場の方程式 (2.6), (2.7) から粒子的振舞うようになるのは ψ_μ, A_μ がそれぞれ、反交換 (フェルミオン)、交換関係 (ボゾン) をもつ演算子とみなす、すなわち非量子化を行う、必要がある。

$$\left. \begin{aligned} [\psi_\lambda(x), \psi_\mu^*(x')]_+ &= \delta_{\lambda\mu} \delta(x-x') \\ [\psi_\lambda(x), \psi_\mu(x')]_+ &= [\psi_\lambda^*(x), \psi_\mu^*(x')]_+ = 0 \end{aligned} \right\} \quad (2.13)$$

$$\left. \begin{aligned} [A_\lambda(x), \frac{\partial}{\partial t} A_\mu(x')] &= i\hbar c^2 \delta_{\lambda\mu} \delta(x-x') \\ [A_\lambda(x), A_\mu(x')] &= [\frac{\partial}{\partial t} A_\lambda(x), \frac{\partial}{\partial t} A_\mu(x')] = 0 \end{aligned} \right\} \quad (2.14)$$

ψ, ψ^\dagger 及び $A_\mu, \frac{1}{i\hbar c} \frac{\partial}{\partial t} A_\mu$ は各々正準共役な関係にある。

輻射場と相互作用のない Dirac 方程式の解は平面波で表わされ4つの独立な固有解がある。これらと

$$u^{(2)}(\mathbf{p}) e^{iP_\mu x_\mu/\hbar}, v^{(2)}(\mathbf{p}) e^{-iP_\mu x_\mu/\hbar} \quad (2=1,2) \quad (2.15)$$

とかく。ここで

$$(P_\mu) = (\mathbf{p}, iE_p/c), \quad E_p = \sqrt{c^2 p^2 + m^2 c^4} \quad (2.16)$$

である。これらは、 u が電子 $\bar{\psi}$, v が陽電子 ψ , $2=1,2$ はスピンの上、下 $\bar{\psi}$ を表わすような固有関数になっている。これらより電子場を展開し

$$\psi = \psi^- + \psi^+, \quad \bar{\psi} = \bar{\psi}^- + \bar{\psi}^+ \quad (2.17)$$

$$\left. \begin{aligned} \psi^-(x_\mu) &= \frac{1}{(2\pi\hbar)^{3/2}} \int d^3p \sum_{2=1,2} a^{(2)}(\mathbf{p}) u^{(2)}(\mathbf{p}) e^{iP_\mu x_\mu/\hbar} \\ \psi^+(x_\mu) &= \frac{1}{(2\pi\hbar)^{3/2}} \int d^3p \sum_{2=1,2} b^{(2)}(\mathbf{p}) v^{(2)}(\mathbf{p}) e^{-iP_\mu x_\mu/\hbar} \end{aligned} \right\} (2.18)$$

とおくと、 a, b は演算子として次の交換関係を満足する：

$$\left. \begin{aligned} [a^{(2)}(\mathbf{p}), a^{(3)\dagger}(\mathbf{p}')]_+ &= \delta_{23} \delta(\mathbf{p}-\mathbf{p}') \\ [b^{(2)}(\mathbf{p}), b^{(3)\dagger}(\mathbf{p}')]_{-} &= \delta_{23} \delta(\mathbf{p}-\mathbf{p}') \quad \text{etc.} \end{aligned} \right\} (2.19)$$

同様に輻射場もやはり相互作用のない輻射場の固有解である平面波で展開する：

$$A_\mu = A^+ + A^- \quad (2.20)$$

$$\left. \begin{aligned} A_\lambda^+(x_\mu) &= \frac{1}{(2\pi)^{3/2}} \int d^3k \frac{1}{\sqrt{2\hbar}} a_\mu^\dagger(\mathbf{k}) e^{-iK_\mu x} \\ A_\lambda^-(x_\mu) &= \frac{1}{(2\pi)^{3/2}} \int d^3k \frac{1}{\sqrt{2\hbar}} a_\mu(\mathbf{k}) e^{iK_\mu x} \end{aligned} \right\} (2.21)$$

$$(K_\mu) = (k, i k) \quad k = |k| \quad]$$

と存子。 a_μ, a_μ^* は演算子で

$$[a_\lambda(k), a_\mu^*(k')] = \delta_{\lambda\mu} \delta(k-k') \text{ etc.} \quad (2.22)$$

を満足する。

$a^{(2)\dagger}(p), b^{(2)\dagger}(p), a_\mu^*(k)$ は電子, 陽電子, 光子に対する発生演算子 (C.O.) となり, $a^{(2)}(p), b^{(2)}(p), a_\mu(k)$ はそれらに対する消滅演算子 (A.O.) と存子。そこで $|0\rangle$ を真空の状態ベクトルとすれば

$$a^{(2)}(p)|0\rangle = 0, \quad b^{(2)}(p)|0\rangle = 0, \quad a_\mu(k)|0\rangle = 0 \quad (2.23)$$

となり, 単位体積中の電子 $(p_1, r_1), (p_2, r_2), \dots$ 陽電子 $(q_1, s_1), (q_2, s_2), \dots$, 光子 $(k_1, \mu_1), (k_2, \mu_2), \dots$ がある状態は

$$\begin{aligned} & a^{(2)\dagger}(p_1) a^{(2)\dagger}(p_2) \dots b^{(s_1)\dagger}(q_1) b^{(s_2)\dagger}(q_2) \dots \\ & a_{\mu_1}^*(k_1) a_{\mu_2}^*(k_2) \dots |0\rangle \end{aligned} \quad (2.24)$$

で表わされる。

そこで

$$a_0^*(k) = -i a_4(k), \quad a_0(k) = -i a_4^*(k) \quad (2.25)$$

とおくと

$$\left. \begin{aligned} n^-(p, r) &= a^{(2)\dagger}(p) a^{(2)}(p) \\ n^+(p, r) &= b^{(2)\dagger}(p) b^{(2)}(p) \\ n(k) &= a_0(k)^* a_0(k) \end{aligned} \right\} \quad (2.26)$$

は電子, 陽電子, 光子に対する同数演算子と光子。

$\psi^-, \bar{\psi}^-, A_\mu^-$ は電子, 陽電子, 光子の A.O. の関係する部分, $\bar{\psi}^+, \psi^+, A_\mu^+$ はこれらの C.O. の関係する部分である。

§3. QEDにおける数学的方法

以下, 自然単位 ($c = \hbar = 1$) をもちいる。(2.12)の相互作用の Hamiltonian 密度 $-\frac{1}{c} \mathbf{j} \cdot \mathbf{A}$ を演算子とみよとききは

$$\begin{aligned} H_1 &= \int d^3x (ie \bar{\psi} \gamma_\mu \psi A_\mu) \\ &= ie \int d^3x (A_\mu (\bar{\psi}^+ \gamma_\mu \psi^+ + \bar{\psi}^+ \gamma_\mu \psi^- - \psi^+ \gamma_\mu \bar{\psi}^- \\ &\quad + \bar{\psi}^- \gamma_\mu \psi^-)) \end{aligned} \quad (3.1)$$

とみよおす必要がある。これは δ 種 ϵ であらわし, $\bar{\psi} \gamma_\mu \psi$ 中の C.O., A.O. を別べかえて, C.O. と A.O. の左におくよし, その符号 ϵ と

$$\epsilon = \left\{ \begin{array}{l} \left\{ \begin{array}{ll} + & \text{偶置換} \\ - & \text{奇置換} \end{array} \right\} \text{フェルミオン} \\ + & \text{ボソン} \end{array} \right\} \quad (3.2)$$

とよものである。

相互作用する輻射場と電子場に対する Schrödinger 方程式 (2.10) は相互作用表示 $\Psi(t)$ で

$$\Psi'(t) = U'(t) \Psi(t) \quad U'(t) = e^{-\frac{i}{\hbar} H_0 t} \quad (3.3)$$

なる因子と

$$i\hbar \frac{\partial \Psi}{\partial t} = \bar{H}(t) \Psi \quad \bar{H}(t) = U'^{-1} H_1 U' \quad (3.4)$$

となり。この初期値問題に対する解は

$$\Psi(t) = U(t, t_0) \Psi(t_0) \quad (3.5)$$

の形に書くと

$$U(t, t_0) = 1 + \sum_{l=1}^{\infty} (-i)^l \int_{t_0}^t dt_1 \int_{t_0}^{t_1} dt_2 \cdots \int_{t_0}^{t_{l-1}} dt_l \bar{H}(t_1) \bar{H}(t_2) \cdots \bar{H}(t_l) \quad (3.6)$$

となり。ここで S マトリックス $B \in R \in$

$$S = U(\infty, -\infty), \quad S = 1 + R \quad (3.7)$$

で定義する。

S マトリックスを区変形式で表わすと

$$S = \sum_{l=0}^{\infty} \frac{(-i)^l}{l!} \int_{-\infty}^{\infty} \cdots \int_{-\infty}^{\infty} d^4x_1 \cdots d^4x_l T(H(x_1) \cdots H(x_l)) \quad (3.8)$$

となり。ここで T は T 種を表わし、 T 種は $H(x_m)$ ($m=1, \dots, l$) をそれぞれから遠くへ左から右へ移らべ、それが偶置換ならば $+$ 、奇置換ならば $-$ とする。ここで contraction

$$\{A(x), B(y)\} = T(AB) - S(AB) \quad (3.9)$$

を定義する。Wickの定理によれば、演算子 b_1, \dots, b_l の T 種は contraction と S 種の積で表わせば：

$$T(b_1 \cdots b_l) = \sum_m \sum_n \varepsilon(m_1, \dots, m_l) \{b_{m_1}, b_{m_2}\} \{b_{m_3}, b_{m_4}\} \cdots$$

は Feynman グラフの積に歸着する。そして \rightarrow, \sim は各々超関数に対応し R_{ba} と計算することは Feynman グラフに対応する積分を実行することになる。

§4. Burgers 乱流

前節で、 Ψ に対応する一般解や、 S_{ba} (a は R_{ba}) の実際の寄与するのは $\langle \Psi |$ 中の A.O. に対応する C.O. と $|\Psi_a\rangle$ 中の C.O. に対応する A.O. の項のみであることを見出した。これらの類似した数学的構造が Hopf 方程式の解析において現れることを見る。

ある種の Burgers 乱流では $u = u(x, t)$ に対する Burgers 方程式:

$$\frac{\partial u}{\partial t} + u \frac{\partial u}{\partial x} = \nu \frac{\partial^2 u}{\partial x^2} \quad (4.1)$$

を u は v の Fourier 変換 $v(k, t)$ に対する方程式:

$$\frac{\partial v}{\partial t} + \nu \int_{-\infty}^{\infty} k' v(k-k') v(k') dk' + \nu k^2 v = 0 \quad (4.2)$$

の初期の乱流状態に対するその発展を論ずる。³⁾ (4.2) に対する

する Hopf 方程式は

$$\frac{\partial \Phi}{\partial t} + A \Phi = 0 \quad \Phi = \Phi[\xi(k), t] \quad (4.3)$$

$$A = -\mathcal{D}_2 k_2 + \nu \mathcal{D}_1 k_1$$

$$\mathcal{D}_1 = \int_{-\infty}^{\infty} a_{k_1} \xi(k_1) \mathcal{D}_1$$

$$\mathcal{D}_2 = \int_{-\infty}^{\infty} dk_2 dk_1 \xi(k_2 + k_1) \mathcal{D}_2 \mathcal{D}_1$$

(4.4)

$$D_2 = \frac{\delta}{\delta \psi(k_1)}$$

である。\$\Psi\$ の初期値として

$$\hat{\Psi}[\xi] = \Psi[\xi, 0] = \exp\left(-\frac{1}{2} K_{21} \xi_2 \xi_1\right) \quad (4.5)$$

$$K_{21} = \iint_{-\infty}^{\infty} dk_2 dk_1 \hat{E}(k_2) \delta(k_2 + k_1)$$

と置く。ここで \$\hat{E}(k)\$ は初期のエネルギー・スペクトルである。

Hopf 方程式 (4.3) を独立変数の変換によって、\$A\$ が波の間の相互作用の値のみを記述する "相互作用表示" をつくることができるようにする：

$$\xi(k) = \psi(k) e^{-\nu k^2 t} \quad (4.6)$$

$$s = t$$

$$\frac{\partial \Psi}{\partial s} + A(s) \Psi = 0 \quad (4.7)$$

$$A(s) = -D_{21} k_2 e^{2k_2 k_1 s}$$

$$D_{21} = \iint_{-\infty}^{\infty} dk_2 dk_1 \xi(k_2 + k_1) D_2 D_1 \quad (4.8)$$

$$D_2 = \frac{\delta}{\delta \xi(k_1)}$$

初期条件は

$$\Psi[s, 0] = \hat{\Psi}[\xi] = \exp\left(-\frac{1}{2} K_{21} \xi_2 \xi_1\right) \quad (4.9)$$

$$K_{21} = \iint dk_2 dk_1 \hat{E}(k_2) \delta(k_2 + k_1)$$

である。

以下 \$s \in t\$ である。 (4.7) の解を

$$\Phi[S, t] = U(t, 0) \hat{\Phi} \quad (4.10)$$

と書くと U は

$$\frac{dU}{dt} + A(t)U = 0 \quad (4.11)$$

を満足し、その解は

$$U(t, 0) = 1 + \sum_{l=1}^{\infty} (-1)^l \int_0^t dt_1 \int_0^{t_1} dt_2 \cdots \int_0^{t_{l-1}} dt_l \\ A(t_1) A(t_2) \cdots A(t_l) \quad (4.12)$$

の形に書け、(3.4) と同形である。

ある時刻 t におけるエネルギー $E(k, t)$ は

$$E(k, t) \delta(k' + k) = \left[\frac{\delta^2 \Phi}{\delta S(k') \delta S(k)} \right]_{S, S' = 0} \\ = \left[\frac{\delta^2}{\delta S' \delta S} U \hat{\Phi} \right]_{S, S' = 0} \quad (4.13)$$

から求めらる。そこで $U \hat{\Phi}$ の中で S について 2 次の項だけを取り出せばよい。なぜならば、2 次より低次の項は微分したとき落ち、高次の項は $S', S = 0$ としたとき落ちるからである。これは前節で $\delta^2 \Phi$ の 2 項を取り出したのと同じ考えである。それ故、 $S \in C, 0, \frac{\delta}{\delta S} \in A, 0$ に対応させよう。これらの関係がえられる。

§5. 考察

以上、QED と SHD の相違点、相違点について論じた。前節で数学的相違点を指摘したが、物理的には重大な相違点

がある。QEDではくりこみを行えば、近似の数値をとれば十分であるが、 μ HDでは非常に高次元でとらなければ十分でない。あるいはこのように展開が収束するかどうかも確かでない。これは乱流での非線形相互作用が非常に強いためである。そこで、くりこみのように考えをうまく処理する必要があると思われる。

参考文献:

- 1) Feynman, R.P.: Quantum Electrodynamics (1962, Benjamin)
- 2) ハイトラー, W. (江口克郎訳): 輻射の量子論^{上, 下} (1957, 1958, 玄圃書房)
- 3) 桑原真二: 教理講究録 No.120 (1971) p 124
- 4) 桑原真二: 統計力学 (1976, 法政大学)
- 5) 朝永, 福田, 福田, 沢田: 場の量子論 (1955, 岩波講座現代物理学)